

ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』
第2巻第3区分第1部第4問題(第101段落まで) 試訳

石田 隆太／本間 裕之

はじめに

本稿は、ドゥンス・スコトゥスの『「命題集」講義録』第2巻第3区分第1部「個体化の原理について」第4問題の試訳であり、これ以前の試訳¹に続くものである。凡例についても前稿を参照されたい。

この稿から註にて新たに使用した略号の一覧は次の通りである。

Colligan

Colligan, O. A. (ed). St. John Damascene, *Dialectica: Version of Robert Grosseteste*. St. Bonaventure, N. Y. - Louvain - Paderborn: The Franciscan Institute - Éditions Nauwelaerts - Ferdinand Schöningh, 1953.

De Wulf & Hoffmans

De Wulf, M. & Hoffmans, J. (ed). *Les quodlibet cinq, six et sept de Godefroid de Fontaines*. Louvain: l'Institut supérieur de philosophie de l'Université, 1914.

第4問題は、質料の実体の個性が附帯性の一つである量によって存在するの可否かを問題とする。まずスコトゥスは、質料の実体が有する個性の原因が量であるという見解を保持する権威として、ボエティウス(第62段落)、ダマスケヌス(第63段落)、アヴィセンナ(第64段落)を列挙する。そのうえで、第65段落ではそうした見解に反対する議論を一つ提示する。これはスコトゥス自身の立場を反映したものである。彼は、これまでの問題と比べても大部の議論を展開する第4問題全体を通じて、個体化の原理が量であるという見解の批判を行っていく。

第66段落から始まる第4問題の中核的な部分で彼は、まずは第66段落から第70段落にかけて、批判の対象となる見解を改めて整理する。おそらくはここで紹介されている諸議論こそスコトゥスが直接的に立ち向かっている論陣であり、ヴァチカ

¹ 『筑波哲学』26(2018): 123-38; 28(2020): 75-88.

ン版の註でもトマス・アクィナス、エギディウス・ロマヌス、フォンテーヌのゴドフロワ、サットンのトマスといった面々の名が挙げられている（VAT, tom. 18, p. 247）。紹介されている諸議論は大別すると二つある。第一の議論を示す第67段落では、最初にアリストテレスの『形而上学』第5巻を参照して、量が同じ理拠に属する諸部分への分割を第一にもたらすものだという理解が得られる。その上で、同じ理拠に属する諸部分への分割である種の諸個体への分割を第一にもたらすものとして量が位置づけられる。第二の議論を示す第68段落では、「この火の形相」と「あの火の形相」を例にして、そうした形相の区別の前提として質料が別々であることが要請され、さらに質料が別々であるためには量によってそれらの質料が分割されることが要請されるとして、量が「諸個体が区別され複数化される第一原因」だと結論づけられる。質料が別々であるためには量による分割が必要だという点については第69段落において補足が加えられる。そこではアリストテレスの『形而上学』第7巻が最初に参照される。第70段落では、第62段落から第64段落にかけて列挙された諸権威が、ここまでに紹介されてきた見解によって好意的に受け取られていることにも言及される。

第71段落からスコトゥスによる批判的考察が本格的に始まる。彼は主として四つの観点から具体的な批判を展開するが、第71段落では前置きとして、自分が目下の問題をどのように理解しているかを示す。彼が問題にしているのは、数的に一つのものすべてに当てはまるような抽象的な一性の原因が何かということではなくて、「この石」ならまさに「この石」にしかないような個性の原因が何かということである。第72段落で彼は、第73段落以降では「四つの途」によって批判を行うことを宣言し、またそのうちの三つの途（第一の途～第三の途）は附帯性が個体化の原理であると考えた立場全般に対する批判であることも示す。四つの途とは具体的にはそれぞれ、①単数性（第73-78段落）、②附帯性に対する実体の秩序（第79-90段落）、③範疇の体系（第91-94段落）、④量（第95-101段落）に注目する議論である。この構成は、『オルディナティオ』における並行箇所（第2巻第3区分第1部第4問題第76-104段落）とも共通している。ここでは、それぞれの途の概要を示す段落の内容を中心に簡潔に解説するにとどめておきたい。

単数性 (*singularitas*) や数的な一性に注目する第一の途には、大別して二つの議論がある。第一の議論の骨格を示す第73段落によれば、まず、質料の実体が実体的に変化することなく単数であり数的に一であるのはそれがもつ固有な単数性ないし数

的な一性に由来する。しかるに、質料の実体が実体的に変化しない場合にはいかなる附帯性も必要ではない。それゆえ、質料の実体が単数であり数的に一であるためにはいかなる附帯性も必要ではない。小前提の証明は第74段落で行われる。第75段落以降は想定される反論とそれに対する応答を示している(第77段落まで)。次に第二の議論を示す第78段落によれば、まず、同時に存在しない二つの実体変化あるいは実体産出は同一の実体をその第一の終極として有することができない。しかるにそれとは反対のことが、もし質料の実体にとって個体化の原理が量であるとしたら生じてしまう。それゆえ、個体化の原理が量であると考えする必要はない。小前提の説明では聖体の秘跡におけるパンの実体変化が実例として取りあげられる。

第二の途は、附帯性に対する実体の秩序に注目する。第79段落によれば、まず、アリストテレスの『形而上学』第7巻を権威として、実体はあらゆる附帯性に先行する。こうした先行についてスコトゥスは、それを質料や神に当てはまることとしてのみ解釈するアヴェロエスの意見を斥けて、それがあくまで実体の本性やその体系全体のことを言っているという理解を適切なものとして提示する。その上で彼によれば、実体の先行性により、実体よりも後のものが実体の体系に関する原理にはなりえない。それゆえ、実体の類にある個体についても同様に、附帯性の一つである量はその原理になることはできない。第80段落以降は想定される反論とそれに対する応答を示している(第90段落まで)。『オルディナティオ』における並行箇所との違いを一つ挙げるとするならば、量は実体に対して個体としてのあり方を跡づける(*derelinquere*)というエギディウスの意見への言及と論駁が第三の途ではなくて第二の途で行われている(第84-89段落)。さらに言えば、『オルディナティオ』では第三の途において行われる想定反論とそれに対する応答が、『講義録』ではすべて第二の途のなかに組み込まれている。それゆえ、『講義録』における第三の途には想定反論とそれに応答する部分が含まれていないが、『オルディナティオ』の叙述を踏まえるならば、このことは第三の途に想定反論が全く予想されないことを意味するわけではないと判断できる。

範疇の体系(*coordinatio praedicamentalis*)に注目する第三の途には、大別して四つの議論がある。第一の議論の骨格を示す第91段落によれば、まず、それぞれの範疇がもつ範疇の体系を単独で見るとすれば、それには自らの体系に属するものだけが含まれる。しかるに、範疇の体系には最高類のみならず最下位のもの(すなわち個体)も存在するのであり、実体範疇の体系にも個体が含まれている。以上から、実体範

疇の体系に属する個体がそれ以外の体系に属するものによって原因されることが否定される。同様のことを第二の議論（第92段落）と第三の議論（第93段落）は述定（*praedicatio*）について展開し直している。なお、『講義録』と『オルディナティオ』では、ここで言う第二の議論と第三の議論が提示される順番が逆である。つまり『オルディナティオ』では、ここでの第三の議論が第二の議論として、ここでの第二の議論が第三の議論として提示されている。最後に第四の議論は、ソクラテスが白さという質の類に属するものによって特定化されるとしても実体の類において特定化されているわけではないという事例に訴えかけることで、実体が実体以外の類に属するものによって個体化されることを否定する（第94段落）。

第四の途は、これまでの三つの途とは異なり量という附帯性に特化している。第95段落によれば、仮に量が個体化の原理であるとするなら、その場合の量とは限定された量（*quantitas terminata*）か限定されない量（*quantitas interminata*）のいずれかだったであろうが、まず前者はありえない。なぜなら、量が限定されるのは実体形相が質料に到来した後のことであるので、そうした量はむしろ実体が成立した後の結果であるからである。次に後者もありえない。なぜなら、論敵によれば限定されない量は生成するものと消滅するものとで同一だとされるが、そうなるそうした量はそもそも或る特定のものを限定する原理にはなりえないからである。第96段落以降は想定される反論とそれに対する応答を示している（第101段落まで）。

続く箇所の試訳については後稿を期することにした。なお本稿は、下訳を I が作成した上で訳者二人が検討を加えて作成したものである (I) ²。

試訳

第4問題

量はそれによって質料の実体がこれ [*haec*] であり、単数 [*singularis*] であり、諸々の下属的部分へと不可分 [*indivisibilis*] であるところの定立者 [*positivum*] ³であるのか

² 本稿は、JSPS 科研費 18K12191 (石田) の助成を受けたものである。またこの場を借りて、さまざまな学恩に対して廣川洋一先生には感謝申し上げるとともに、追悼の意を示したい (I)。

³ 前稿では「定立物」という訳語をあてたが、この訳語では「定立される／た物」という意味にも取られかねないため、「(何かを) 定立させる者」という意味で「定立者」という訳語をこの稿では用いることにする (I)。

61. 諸々の質料の実体の個体化の原因に関する第四の意見 [Cf. 第66段落] のゆえに、量はそれによって質料の実体がこれであり、単数であり、多数の下の部分へと不可分であるところの定立者であるのか否かが問題とされる。

62. そうであると思われる。

『三位一体論』冒頭でのポエティウスによれば「数における差異をもたらすのは諸々の附帯性であり、もしあなたがそれらすべてを消去するとしても、少なくとも場所を消去することはできない。かくして数において相異なるものどもは相異なる場所においてある」⁴。しかるに、相異なる場所においてあるということはただ量によるのみである。それゆえ、云々。

63. さらに、ダマスケヌスも彼の『初歩』[*Elementarium*] 第5章で言うことには「それによって或るものどもがヒュポスタシ的に [hypostatic] 異なるところのものはすべて附帯性である」⁵。

64. さらに、アヴィセンナの『形而上学』第5巻第2章によれば「存在のために質料を要する本性には諸々の附帯性が到来し、それらによってその本性は個体化される」⁶。

65. 以上 [すなわち第62–64段落] に反対する。

第一実体は第一に生成し作用する [Cf. 第41段落]。さて、[アリストテレスの]『形

⁴ ポエティウス『三位一体論』第1章「(相違) が語られるのも類か種か数によるのです。ただし、数における差異をもたらすものは附帯性のうえでの分化です。たとえば三人の人は、類によってでも種によってでもなく、附帯性によって隔たっているのです。と申しますのも、仮に思考のうえでこの人々から一切の附帯性を取り去ったとしても、なお場所はそれぞれの人について相違しており、これを一つと考えることは決してできないからです——二つの物体が一つの場所を占めることはないはずです。ところで場所は附帯性ですから、附帯性によって複数となることにより、この人々は数において複数なのです」(中世思想原典集成 I.5, p. 178)。

⁵ ダマスケヌス『論理学』(*Dialectica*) 第4章 (Colligan, p. 7, ll. 6–19) 「ある諸事物においてはヒュポスタシスが同じ種および同じ [第二] 実体のヒュポスタシスと異なる。[中略] また、人間が人間と、あるいは馬が馬と、あるいは犬が犬と異なるのは、一方は [体長が] 長いが他方は短いということ、一方は年老いているが他方は年若いということ、一方の人間は思慮深いが他方の人間は浅慮であるということに即している。これらすべては附帯的ないし到来の差異および性質 [accidentales seu adventitiae differentiae et qualitates] と言われ、附帯性のことである」(I)。

⁶ アヴィセンナ『形而上学』第5巻第2章 (Van Riet, 1980, p. 240, ll. 83–85) 「それに対して、こうした諸本性の中で質料を要するものは、質料が準備されていた場合のみ存在を有する。それゆえ、そうした本性の存在には諸々の附帯性および態勢が外から到来し、それらによってその本性は個体化される」(I)。

而上学』第6巻によれば、「附帯的な有」〔ens per accidens〕は第一に生成しない⁷。——また〔第一に〕作用しない。なぜなら同所で明らかのように、それは「非有のようである」からである⁸。ところで、実体と（量のような）附帯性による複合体は附帯的な有である。それゆえ、それには生成も作用も第一には属さないことになる。それゆえ、質料の実体も量によって第一実体であり単数であるのではないことになる。

I. 問題に対して

A. 他の人々の意見

1. 意見の解説

66. この問題に対して或る人々が言うことには、量はそれによって質料の実体がこれであり単数であるところの定立者である⁹。

67. 彼らはこのことを次のように証明する。

第一には、『形而上学』第5巻での哲学者〔アリストテレス〕による。彼が言うことには「どれくらいの量か」〔quantum〕は内にあるものども〔つまり諸々の部分〕へと分割されるものであり、そのものどものうちの個々のものは一つの或るもの〔unum-aliquid〕でありこの或るもの〔hoc-aliquid〕であるよう本性づけられている¹⁰。これから受け取られるのは、同じ理拠に属する諸部分へと分割されることが量には第一に適合するということである。そこで次のように議論される。或るものに第一に適合するものが任意のものに適合するのは、その或るものの理拠によってである。——それゆえ、同じ理拠に属する諸部分へと分割されることが量には第一に適合するのだから、このことが任意のものに適合するのは量の理拠によってであることになる。さて、諸

⁷ アリストテレス『形而上学』第6巻第2章 1026b22–24「他の意味での存在には生成や消滅の過程があるが、この付帯的な意味での存在にはそれがない」（アリストテレス全集旧 12, p. 197）。

⁸ 同 1026b21「明らかにこうした付帯的な意味での存在は非存在にきわめて近いものである」（同）。

⁹ トマス・アクィナス『「命題集」註解』第4巻第12区分第1問題第1項第3小問題主文および第3異論解答；『神学大全』第1部第50問題第2項主文；第3部第77問題第2項主文；『対異教徒大全』第2巻第50章；第4巻第65章；エギディウス・ロマヌス『第1任意討論集』第11問題主文；フォンテーヌのゴドフロワ『第7任意討論集』第5問題主文；『第6任意討論集』第16問題主文；サットン・トマス『第1任意討論集』第21問題主文。

¹⁰ アリストテレス『形而上学』第5巻第13章 1020a7–8「もののボソン〔量、本来の語義はどれだけ、いかほど、等々の意〕というのは、それらの各部分が自然的に或る一つのものであり、またはこれと指し示されうるものであるところの或る幾つかの内在的構成部分に分割されうるもののことである」（アリストテレス全集旧 12, p. 165）。

個体への種の分割は同じ理拠に属する諸部分への分割である。なぜなら、この点において諸個体への種の分割は諸々の種への類の分割から区別されるからである。しかるに、或るものどもの分割がそれによってあるのと同じものによって、分割される同じものどもの区別がある。それゆえ、同じ種の諸個体は量によって区別される。——ここからの帰結として、質料の実体は量によって単数となる¹¹。

68. さらには——[或る]火が[他の]火と別のものであるように——「この質料の実体」があ質料の実体と別のものであるのは、[一方の]形相が[他方の]形相と相異しているからにほかならない。さて、この火の形相があ質料の火の形相と相異しているのは、それが別の質料において受容されるからにほかならない（というのも、形相に即して絶対的にあるあらゆる区別は種的であるのだから、[この火の形相とあ質料の火の形相は]形相の理拠においては区別されないからである。それゆえ、形相が相異化されるのは、それが別の質料においてあるからにほかならない）。しかるに、質料が複数化されたり分割されたりするのは量によってのみである（すなわち質料の別の部分が量の別の部分の下にあるからである）。それゆえ、量は諸個体が区別され複数化される第一原因である¹²。

69. 理拠[Cf. 第68段落]が補強される。哲学者[アリストテレス]の『形而上学』第7巻によれば、生成するものは質料のゆえに別のもを生成する。なぜなら、生成されるものの質料は生成するものとは別のもだからである。しかるに、質料が別のもでありうるのは、それが量をもつもの[*quanta*]でありしかも別の量によってそうである場合のみである。その理由は次の通りである。量をもつものであることが第一に要求されるのは、本性的な能動者が「量をもつもの」に対してのみ能動するからである。また別の量によって量をもつものであることが要求されるのは、そうでなければ質料が別のもではなかつたろうからである。それゆえ、生成するものと生成されるものの第一義的な区別は量の側から受け取られる¹³。

¹¹ フォンテーヌのゴドフロワ『第7任意討論集』第5問題主文；サットンのトマス『第1任意討論集』第21問題主文。

¹² トマス・アクィナス『対異教徒大全』第2巻第49章、第80-81章；フォンテーヌのゴドフロワ『第7任意討論集』第5問題主文。

¹³ フォンテーヌのゴドフロワ『第7任意討論集』第5問題主文；『第11任意討論集』第3問題主文；サットンのトマス『第1任意討論集』第21問題主文；アリストテレス『形而上学』第7巻第8章 1034a4-8「生むものがありさえすれば、生産するのにはそれで十分である、すなわち、その質料のうち形相[種]を原因するものがあればそれだけで十分である。そして、すでにそこに[この両者の結合された]全一的なものの存するとき、すなわちこのような形相がこれなる肉や骨のうち存するとき、これがカルリアスでありあるいはソクラテスである。この二

70. この意見に味方するなら、問題に対する諸権威 [Cf. 第 62–64 段落] も引き合いに出される¹⁴。

2. 意見の否認

71. この意見について見るために、私は問題の理解に属する一つのことを前置きとする。すなわち、数において一つのものが数において「この一つのもの」やあの一つのものから共通している数的な一性の理拠において抽象されうるかぎりで個体化の原因について漠然と問われているのではない。——むしろ問われているのは、何ゆえに質料の実体はこの規定された単数性によって単数なのかであり、すなわち、何ゆえに石は「この石」が別の石ではありえないようにして「この石」であるのかである。

72. それゆえ、そのように問題を理解するなら質料の実体は量によって——解説されたように——これであり、単数であり、数において一つであるといったことはありえないことを私は四つの途によって示す。それらのうちの三つの途はあらゆる附帯性について全般的に、いかなる附帯性も質料の実体が「これ」である原因ではありえないことを示している。

a. 第一の途：単数性の側から

73. それらのうちの第一の途は、単数性の側および数的な一性の理拠から次のようにして受け取られる。

同じものそのまま存在する質料の実体、すなわち数において一であり単数であり、消滅せず無化もされず、また全般的に実体的には変化しない質料の実体は、この単数性によってはこれでないものになることができない。というのも、それはそれ自体で真の実体だからである（実際、実体的には変化しないということから、質料の実体は自らの単数性において数という点では同じ実体のまま留まる。というのも、そうでな

人は、それぞれその質料の点では異なっている（というのは質料がそれぞれ異なるからである）、しかし形相〔種〕においては同じである（というのは形相〔種〕は不可分だからである）」（アリストテレス全集旧 12, p. 233）。

¹⁴ フォンテーヌのゴドフロワ『第7任意討論集』第5問題主文（De Wulf & Hoffmans, pp. 319–20）でも、ポルピュリオス、ポエティウス、ダマスケヌス、アヴィセンナが諸権威とされている（I）。

れば数において同じものが数において多数のものであることになるからである)。しかるに、質料の実体が現実態において留まりながらいかなる点においても実体的に変化しないなら、[次の段落で]証明されることになるように、それは量や何であれ別々の附帯性を有することを要求しない。それゆえ、いかなる質料の実体も何らかの附帯性によってこれであり単数であるということはない。

74. 小前提の証明。「この質料の実体」が存在できることと、「この量」が内にあるのではなくて別の量が内にあるということには矛盾がない。したがって、もし内属するこの量によって質料の実体が「これ」であり単数だったとするなら、それが実体的に変化しなくてもこの実体からこれでない実体が生じることが帰結しただろうが、それは偽である。

75. あなたは次のように言うだろう。神は奇跡によって本性が許さない多数のものを造ることができる、と。

76. これに反対する。神は矛盾を含むものを造ることができない。しかるに、この質料の実体がこれでないものになったり実体変化なしに自らの単数性を放棄したりすることは矛盾である。それにもかかわらず、もし量や何であれ附帯性が単数性の原因だったとするなら、こうしたことが帰結しただろう。

77. さらに、奇跡がないところで議論される。希薄化[rarefactio]において、多数のことに關してこの意見に属する著者[すなわちトマス・アクィナス]をより善く解説する一人の博士[すなわちフォンテーヌのゴドフロワ]が言っていることによれば、希薄化において量は数において同じまま留まるのではなくて、より先にある量は全くもって消滅する(ゴドフロワの意見は愛徳の増大において扱われている¹⁵)¹⁶。したがって、希薄化においては量に変化しても実体は同じまま留まる(あるいは少なくとも、あらゆる人々によれば、濃密化[condensatio]においては量全体が[同じまま]留まるのではない¹⁷)。したがって、もし実体の単数性が量に由来するとするなら、それは数的に同じ実体のまま留まるのであって同じ単数性を有さないものであると

¹⁵ Cf. ドウンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第1巻第17区分第145段落。

¹⁶ フォンテーヌのゴドフロワ『第11任意討論集』第3問題主文。

¹⁷ ボナヴェントゥラ『「命題集」註解』第1巻第17区分第2部第1項第1問題第3異論解答；トマス・アクィナス『「自然学」註解』第4巻第4講；メディアヴィアのリカルドゥス『第2任意討論集』第14問題主文；サットンのトマス『定期討論集』第11問題主文；『第2任意討論集』第18問題主文。

ということが帰結し、かくして数において同じ実体ではないことになり、以前と同じ実体の個体でもないことになる。——それは偽である。そしてさらに帰結することには、もし希薄化した量が後になって濃密化したものになるとするなら、同じ量が同じ数の下で戻ることになる。したがって、もし質料の実体が量によって単数性を有するとするなら、この単数性を有さないものが実体変化なしにこの単数性を有するものになるということが帰結する。——そうしたことすべてが不可能である。

78. さらに、同時には存在しない二つの実体変化ないし実体産出は、数において同じ第一の終極としてこの実体を有することはできない（証明は次の通りである。もしこの実体はその産出によって十分に産出されるなら、それはこの産出によって自らの存在全体を有し、他の産出はこの産出と同時に存在しない。それゆえ、もしその実体が他の十分な産出を有するとするなら、それはまた自らの存在全体を掴み取っている。それゆえ、同じものが存在を有した後に新たに自らの存在を掴み取っており、かくしてそれは二度〔自らの存在全体を〕掴み取っていることになる）。しかるに、もし質料の実体が量によって自らの単数性を有するとするなら、こうしたことが帰結する。その理由は次の通りである。〔聖体の秘跡で用いられる〕パンは生成した後に実体変化する〔transubstantiare〕はずである。その場合、その量はそれ自体で〔同じまま〕留まる。そして〔実体としては〕別のパンが〔キリストの身体として〕創造されるはずであるが、それはその量によって状態づけられる。それゆえ、それらの産出は「この実体」を同じ単数性において第一の終極として有することになる。なぜなら、不可分の実体の同じ単数性は二つの実体においては存在できないからである。なぜなら、そうだとすると同じ個体および同じ単数のものが二つの個体および二つの単数のものだったろうからである。

b. 第二の途：諸々の附帯性に対する実体の秩序に基づいて

79. さらに、私は第二の途によって前述の意見に反対して議論する。それは量や他の諸々の附帯性に対する実体の秩序に基づいてとられる途である。『形而上学』第7巻での哲学者〔アリストテレス〕によれば、実体は量や他のあらゆる附帯性よりも先

である¹⁸。そしてこうした「先行性」は実体の本性やその体系〔*coordinatio*〕¹⁹全体に即しているのであって、註釈家〔アヴェロエス〕がその箇所でのことをあらゆる量よりも先である質料のこととして、あるいはあらゆる量に先行する神のこととして悪しく解説していることに即してではない²⁰。実際、これは哲学者〔アリストテレス〕の意図には沿っていない。その理由は次の通りである。彼〔アリストテレス〕が証明しようとすることには、有全体について規定するためには有を分割する第一のものである実体について規定することで十分である。なぜなら、他のものどもに対して有を分割するものであるという実体それ自体に関する認識が有されると、何であれ他のものに関する認識が有されうるからである²¹。しかるに、もしあなたが、実体が何であれ附帯性に先行するのは質料ないし神の理拠によってだということだけを証明したとするなら（神は附帯性に対して有を分割する実体の類においてない）、これでは十分でなかっただろう。というのも、彼がその実体についてその体系全体に即して〔主張することを〕意図しているのは、有が第一にそれへと分割されるところのものが実体であり、かくしてあらゆる附帯性に先行するものが実体であるかぎりでのことだからである。それゆえ、もし実体の体系全体があらゆる附帯性よりも先であるなら、〔実体〕より後のものは何も或るものがそれによってその体系においてあるところのものではありえない。——そこからの帰結として、実体の類にある個体がその類にある個

¹⁸ アリストテレス『形而上学』第7巻第1章 1028a10–b2.

¹⁹ 前稿では「秩序づけ」という訳語をあてたが、「秩序立った全体」を意味する訳語として、渋谷克美のように「体系」をこの稿では用いることにする（H）。

²⁰ アヴェロエス『アリストテレス「形而上学」大註解』第7巻第2註解（*Juncta*, 1562, VIII, f. 153vab, litt. G–K）「そして、「有」という名は諸範疇の〔十の〕類について言われるのだと宣言されている際には、次のことが明白である。すなわち、この名がそれについて言われる第一のものは端的かつ主要的に、「この個的で指定される自体的に存在するものは何か」〔という問い〕に対する解答において言われるものである。〔中略〕なぜなら、「その指定されるものはどのようなものであるか」が問われている時、私たちは「善いか悪い」と解答する。〔中略〕そして私たちはそれが人間や天球（これをアリストテレスは「神」によって意図していた）であると解答するのではない。〔中略〕それゆえ、この章においてアリストテレスが宣言しようとしているのは、実体の個体に属する何性は諸々の附帯性に属する何性よりも存在において先だということである。というのも、実体の個体が諸々の附帯性の他の個体よりも先にあるものだということとは自体的に明白だからである」（I）。

²¹ Cf. アリストテレス『形而上学』第7巻第1章 1028a36–b2 「なおまた、われわれが或るものを最もよく知っていると思うのは、われわれがその或るもの——人間なら人間の、火なら火の——なにであるか〔本質としての実体〕を認識した場合のことであって、それらのどのようにあるか〔性質〕やどれほどあるか〔量〕やどこにあるか〔場所〕などを認識した場合より以上にそうである。というのは、われわれがこれら〔その性質や量など〕の各々を知っていると言いうるのも、実はこの性質とか量とかのなにであるかを知った場合にであるからである」（アリストテレス全集旧 12, pp. 205–6）。

体であり単数であるのは量によってではないことになる。

80. おそらくあなたは次のように言うだろう。自らの体系全体に即して実体は、存在においてはあらゆる附帯性よりも先ではあるものの、分割においてはそうではない。それは次のようにしてである。実体は量よりも先ではあるものの、「同じ理拠に属する諸部分へ分割される」ということに即しては量の方が先である。なぜなら、このことは量によってのみ実体に当てはまるからである。それゆえ、第一に量が同じ理拠に属する諸部分へと分割されて [次に] 実体が量によって分割される²²。

81. これに反対する。

この解答 [Cf. 第80段落] は第一に [自らの] 意見 [Cf. 第66段落] を破壊する。その理由は次の通りである。もし実体の体系全体に即して実体が量よりも先であるとするなら、任意のものが——その体系に属しているかぎり——量よりも先であることになる。それゆえ、実体の類にある個体は量から不可分の存在を第一に有するのではないことになる。

82. さらに、もし任意の実体が存在において量よりも先であり「現実態における存在」は或る指定されるもの [signatum] にのみ属する²³なら、質料の実体の指定 [signatio] は量の指定よりも先であり、そこからの帰結としてその実体は量によって指定される個体ではない。

83. さらに、解答 [Cf. 第80段落] は提起されたことに沿っていない。実体が量よりも先であるのは、実体が量の基体であるのと同じあり方による。なぜなら実体は、量の基体であるということに即して、付加 [additamentum] によって量の定義——および全般的には附帯性の定義——に入り込んでいるからである。さて実体は、量の基体であり量の定義に入り込んでいるかぎり、量の原因である。ところで、原因のあらゆる類において単数の原因は結果よりも先である。それゆえ、基体であり「これ」であるものとしての実体は量よりも先である。

84. 或る人々の別の解答は次の通りである。量はそれによって実体ないし質料が単数であるところの形相的原理ではない。むしろ量は、実体と実在的に別ではない何ら

²² フォンテーヌのゴドフロワ『第7任意討論集』第5問題主文；サットンのトマス『第1任意討論集』第21問題主文。

²³ 第84段落を見よ。

かのあり方を実体において跡づける〔*derelinquere*〕のであり、そのようにして跡づけられたそのあり方が実体の単数性である。彼らは量について次のような例を措定する。量は同じ理拠に属する諸部分へと第一に可分的であり、それは質料を状態づけながら質料において何らかの状態づけ〔*affectio*〕を跡づける。その状態づけによって質料は同じ理拠に属する諸部分への固有な可分性を有するのであるからして、もし量が質料から分離されると措定されるとするなら、質料はその跡づけられた状態づけに基づいて固有な個別性を有する²⁴。

85. これに反対する。或るものが自身と実在的に同じ或るものをそれよりも本性的に後のものから本性的により先に有しているということは、それが或る存在をその或るものよりも本性的に後のものから有していることよりもありえない。それは〔次の段落以下で〕証明されることになる通りである。しかるに、この解答〔Cf. 第84段落〕が措定することには、実体は量から跡づけられた、実体と別ではない状態づけを獲得するのであり、かくしてまた措定することには、実体は本性的により後である量から自身と同じ或るものを有している。したがってこの解答は、実体が量から或る存在を、すなわち不可分の存在を有していることを措定する、以前の解答〔Cf. 第80段落〕よりもありえないものである。

86. 大前提の証明。或るもの〔a〕が或るもの〔b〕と真にかつ実在的に同じである時、aはbなしには存在できない。なぜならaは、もしかしたら形相的にではないとしても、同一性によってbを内包しているからである。——それゆえ、もしaが自身と実在的に同じであるもの〔すなわちb〕なしに存在することが可能だとしたなら、aとbは実在的に同じでありかつ同じでないということになっただろう。さて明白なことには、〔皆が〕容認しているように、(実体のような)より先のはより後の量なしに存在することが可能である。ところで、もしより先のもものが留まっているとより後のものが存在しないことが可能であるなら、ましてなおさら、より後のものから跡づけられているものは本性に即してより先であるものが留まっていると存在しないことが可能である。それゆえ、その跡づけられたものはより先のもものと実在的に同じではない。

87. さらに原因が、原因する必要条件を自らの結果から有することはありえない。

²⁴ エギディウス・ロマヌス『第1任意討論集』第11問題主文。

なぜならその場合、原因が結果よりも本性的に後になっただろうからである（というのもその場合、原因であるかぎりでの原因が結果に由来しただろうからである）。しかるに、[個体をもたらす] そうした指定は附帯性の原因であるかぎりでの実体に必然的に属する。なぜなら、実体が附帯性を原因するのは実体が単数のものであるかぎりにおいてのみだからである。そしてそれゆえ、そうしたことを回避するのに [エギディウスは]、「形相的な指定」は量に形相的に由来するのではないと措定する。なぜならその場合、単数のものが附帯的な有だっただろうが、それは偽だからである。それゆえ、もし実体が量から分離されるとしても、[エギディウスは] やはり実体は単数であると措定する。それゆえ、実体は何らかの跡づけ [derelictio] による量からのそうした指定を掴み取ってはいない。

88. さらに、私は次のように問う。その跡づけとは何なのか。それは量から原因される或る結果であるのか、あるいはそうした指定を原因する他の形相に後続するのか。さて、(神のものどもにおいて言われるだろうように²⁵) それが或る結果だとしよう。そうだとしてあなたが措定することには——もし量がなかったとしても——その他に質料がやはり量からのそうした跡づけによって個別性を有している²⁶。だが、いずれの結果もそのように量によって原因されていることはありえない。なぜなら、量は能動的形相 [forma activa] ではないからである。他方で、もしそうした跡づけが量とは別のそうした単数性の原因であるような形相に後続するなら、量は余計に措定されていることになる。なぜなら、本性的な能動者がそうした形相を造るのだと私は言っただろうし、またその場合に量は単数性に対して何もしないが使用される腕尺 [ulna] ²⁷ のようだともし言っただろうからである。

89. また、もし量が質料において或るものを跡づけるとするなら、同じ理拠によって白さが、面を完成させることで或る状態づけを面において跡づけただろうが、それは偽である。

90. さらに、前述の結論 [Cf. 第66段落] に対して他の仕方で次のように議論される。哲学者 [アリストテレス] によれば、実体はあらゆる附帯性よりも時間におい

²⁵ Cf. ガンのヘンリクス『スンマ』第60項第8問題主文；ドゥンス・スコトゥス『オルディナティオ』第1巻第12区分第26段落。

²⁶ 第84段落を見よ。

²⁷ Cf. ドゥンス・スコトゥス『オルディナティオ』第2巻第2区分第121段落。

て先である(『形而上学』第7卷)²⁸。そしてこれは、[第79段落で言及されたアヴェロエス]より善く解説されるかぎりでは次のように理解されるべきである。実体はあらゆる附帯性よりも本性に即して先である。そして、本性に即してより先であるものがより後のものなしにあることは本性に即してより先であるものに相反しない。しかも矛盾なくそうである。なぜなら、もしそれが他のものよりも本性に即して先にあるとするなら、仮にそれが他のものなしに措定されるとしてもその存在においては何らの不完全性も見出されないからである。それゆえ、単数の実体が量なしに持続においてあることは両立不可能であるわけではない。だがこれは、もしそれが量によって単数だったとしたなら不可能だっただろう。

c. 第三の途：範疇の体系の理拠に基づいて

91. さらには、第三の途が範疇の体系に基づいて前述の意見に反対して議論される。それだけ切り取って〔praeicise〕受け取られるあらゆる体系においては、他の体系に属するものが何であれ埒外に出されるなら、その体系に属するあらゆるものが見出される。——さらには、一つの体系に属する任意のものは他の体系に属する任意のものと相異なる。それゆえ、実体範疇の体系においては、他の体系に属するものが何であれ埒外に出されるなら、実体範疇の体系に属する任意のものがある。しかるに範疇の秩序は、上方に対して終極を要求するのと同様にして下方に対しても終極を本質的に要求するのであるから、最終物を要求する。それゆえ、他の類に属するものが何であれ埒外に出されるなら、実体の類においては(その類については)最終的な或るものがあることになり、これこそその類に属する単数のものである。それゆえ、云々。

92. さらには、任意の体系に属する最終物はその秩序における上位のものどもの述定を自体的に要求する。しかるに、「附帯的な有」は類における上位のものどもの自体的な「本質的述定」を受容しない。それゆえ、いかなる範疇の体系における最終物も、相異なる体系の諸事物を内包しない。

93. さらには、任意の類における種はその類の理拠に即した種である。しかるに種の理拠には、それが複数のものないし少なくとも一つのものについて述定可能であるということが属する。それゆえ、他の類に属するものが何であれ埒外に出されても、

²⁸ 第79段落を見よ。Cf. トマス・アクィナス『アリストテレス「形而上学」註解』第7巻第1講；エギディウス・ロマヌス『アリストテレス「形而上学」問題集』第7巻第1問題主文。

やはり種は、その種がそれについて述定可能である或るものを有するのであり、これこそ単数のものである。それゆえ、あらゆる附帯性が埒外に出されても、単数のものは実体の類においてある。

94. さらには、或るものが或る厳密な理拠に即して或るものに適合する時——それにはその厳密な理拠が本質的に適合しているし——（帰納的に明らかなように）その理拠に即して適合しているところのものもそうである。しかるに、実体の体系においては「普遍的な存在」が適合し、このことはしかじかの類の絶対的本性の理拠による。それゆえ、その（特定化された本性ではなく）絶対的本性が適合しているところのものはその体系に属する普遍²⁹であることになる。しかるに、或るものが他の類に属する事物によって特定化されたものとして措定されるかぎりでは、何も自らの類において特定化されたものとして措定されることは全くない。——例えば、ソクラテスが白さによって特定化されたものと措定されることによっても、ソクラテスが以前にそうだったよりも実体の類においてより特定化されているわけではない。したがって、もし或るものが他の類に属する事物によって実体の本性において特定化されたものとして措定されるとしたなら、それは同時に単数でありかつ普遍だっただろう。

d. 第四の途：量の側から

95. さらには、第四の途が量の側から前述の意見に反対して議論される。——すなわち以下の通りである。先行する三つの途は全般的にあらゆる附帯性に反対して、いかなる附帯性も単数性の原因ではありえないとしている一方で、この第四の途は特定の量に反対する。すなわち、もし量が単数性の原因であるなら、その量は限定された量〔*quantitas terminata*〕であるか限定されない量〔*quantitas interminata*〕だっただろう³⁰。[まず]それは限定された量ではない。その理由は次の通りである。そうした量は（量が一定の終極を有するがゆえに）形相の存在に後続する。なぜなら、形相が質料を完成させるからである³¹。それゆえ、限定された量は結果として後続するので、

²⁹ 『オルディナティオ』第2巻第3区分第1部第1問題第38段落のように、後にスコトゥスは本性のこうした特性を「共通」と呼び「普遍」とは区別するようになる。目下の箇所『オルディナティオ』における並行箇所（第2巻第3区分第1部第4問題第92段落）にも「共通性」という言葉が見られる（H）。

³⁰ Cf. アヴェロエス『天球の実体について』第1章；フォンテーヌのゴドフロワ『第2任意討論集』第11問題主文。

³¹ Cf. エギディウス・ロマヌス『第2任意討論集』第11問題主文。

それは単数性の原因ではありえない。また限定されない量が個体化の原因ではありえない。その理由は次の通りである。彼らによれば³²、限定されない量は生成するものと消滅するものにおいて同じまま留まる。それゆえ、もし限定されない量が単数性の原因だったとするなら、生成するものと消滅するものは同じ単数のものであり同じ「これ」だっただろう。なぜなら、それらは単数性の同じ理拠を有しただろうからである。

96. あなたは次のように言うだろう。それは帰結しない、と。なぜなら、量は同じ種においてのみ或る個体の個体化の原因でありうるものであり、また、生成するものは消滅するものと同じ種に属していないからである³³。

97. これに反対する。同じ量の諸理拠に即して、水から火が生成し、その後で火が水に消滅していくことが措定されるとしよう。——限定されない量は同じまま留まり同じ種においてある。それゆえ、同じ単数のものがあることになり、そこからの帰結として、消滅するものは本性によって消滅した後に再び数において同じものに戻るようになる³⁴！

98. さらに、しかしかの本性であるかぎりでの本性はどれもそれ自体ではこれ [haec] ではない(それは上で、この区別の第1問題 [第8–32段落] で証明されている通りである)。なぜなら、それ自体で「これ」であるものが普遍の理拠の下で知解されるのは不可能であり、また同様にしてその場合、(そこ [Cf. 第89段落] で導出されているように) 数的な一性よりも小さい実在的な一性は全くなかっただろうからである。しかるに、量は自らの本性のかぎりでは肉のように[この量やあの量に対する] 相応の無差別 [indifferentia] を有している。それゆえ、肉がそれによってあるところの理拠によって肉はそれ自体でこれではないのと同様に、量も——量がそれゆえ

³² トマス・アクィナス『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項主文；フォンテーヌのゴドフロワ『第11任意討論集』第3問題主文；エギディウス・ロマヌス『第4任意討論集』第9問題主文。

³³ フォンテーヌのゴドフロワ『第6任意討論集』第5問題主文；『第7任意討論集』第5問題主文。

³⁴ これはアリストテレスの考えに反することになる。Cf. アリストテレス『自然学』第5巻第4章 228a4–6；『生成と消滅について』第2巻第11章 338b16–18「その本質存在が不滅ではなく、消滅しうるものであるかぎりのものは、必然的に、形相(種)的に[のみ]回帰し、数的には回帰しない。それゆえ、空気からの水、また、水からの空気は、形相(種)的に同じものであるが、数的には同じものではない」(アリストテレス全集新5, p. 347)。

にあるところからは——それ自体でこれではない。というのは、肉がこの肉とあの肉においてそうであるのと同様に、量はこの量とあの量において同じ理拠に属しているからである。しかるにこうしたことは、或るものが「これ」であることと相反する「これ」である第一の理拠ではありえない。それゆえ量は、それによって或るものが或る本性から見て「これ」であるという単数性の原因ではありえない。

99. 彼〔トマス・アクィナス〕は次のように言う。量は位置によってこれである、と³⁵。

100. これに反対する。そうした位置は量の範疇に属するか、それ自体で範疇であるかである。もし前者なら、それは量という類の種差である。その場合、量が種へは特定化されるものの、単数のものへは特定化されない。〔他方で〕もし「位置」が範疇であるとするなら、それは量よりも後のものである。それゆえ、量は位置によって特定化されない。同様にして、位置はこれとあれにおいて同じ理拠に属する。——それゆえ、前の場合〔Cf. 第98段落〕と同じように、この位置〔という範疇〕は類である。

101. さらに、ここにおいて「形相におけるあらゆる差異は種的である」という彼らの「アキレス」〔Cf. 第68段落〕には欠落がある。しかるに、量は形相である。それゆえ、量からの量の相異性は種に即している。それゆえ、二つの量が同じ種において異なることはありえない³⁶！

（いしだ・りゅうた 慶應義塾大学文学部訪問研究員）

（ほんま・ひろゆき 東京大学大学院人文社会系研究科在学）

³⁵ トマス・アクィナス『「命題集」註解』第4巻第12区分第1問題第1項第3小問題第3異論解答；『対異教徒大全』第4巻第65章；『神学大全』第3部第77問題第2項主文；サットンのトマス『第1任意討論集』第21問題主文。

³⁶ スコトゥスはおそらくこれが不合理な帰結であると主張している（H）。